

# 男性の協力を待てない

職場での長時間労働が半ば慣行となっている日本では、男性の家事労働時間が世界最低水準だ。一方で働きながら家事、育児、介護に追われる女性は、切羽詰まっている。これまでたくさん女性を雇ったが、仕事を続けるよう頼んでも辞めていった。保育所の充実と育児休暇、介護休暇の延長が叫ばれているが、男性が家事に割く時間を先進国レベルまで高めるには時間がかかる。女性の活躍を推進するには、外国人の家事労働者(ナニー)の受け入れに優先的に取り組んでいくべきだ。

私自身、日本で仕事をこなしながら3人の子どもを出産



## 佐藤 玖美

Kumi Sato

在日米商工会議所元会長

し育てるため、タイ人の住み込みナニーを雇った。日本人のフルタイムの家政婦は高齢化して数が少なく、利用料は高額だ。アジアでもシンガポール、香港、台湾では外国人ナニーが定着している。日本人が外国人を家庭に入れるのに抵抗感があるのは、そもそも外国人ナニーを体験したとすらないからだ。諸外国にみられるナニーへの虐待等の問題は、個人的には過度な規制を避け、駆け込み寺など民間の支援活動を充実させる方向で取り組むべきだと思う。

タイ人ナニーを雇えたのは夫が「投資・経営」の在留資格を持っている米国人で身元引受人になれたからだ。在日米商工会議所(ACCJ)の労働力多様化タスクフォースは昨年、「世帯の所得合計が700万円以上であることが条件に、日本国民が外国人家事労働者の身元引受人になることを認める」政策を提言した。受け入れ期間は2年に限定し、再申請によって延長する。身元引受人の同意があれば、パートタイムとして他の家庭でも働けるようにする内容。女性が複数で外国人ナニーをシェアすれば、少ない負担で雇うことができる。個人で安心できる人を探すのは大変だと思うかもしれないが、フィリピン人ナニーなど

の口コミネットワークは信頼が置け、インターネットの掲示板を見て頼むのとは違う。政府の成長戦略では、家事支援サービス企業が、特区で外国人家事労働者を雇えるようにする内容が盛り込まれた。こうした企業雇いの派遣では、ACCJの提言に比べサービスが限定されたり、時間帯の料金が高かったりするかもしれない。ただ口コミを頼りに個人的に探すよりは安心感があり、日本女性にとっては未知の世界である外国人ナニーの活用を始め、本格化していくステップとして意義は大きい。

男性も女性も職場と家庭とでバランスよく働くのが理想だが、ビジネスの仕事は待たない。営業していて「育児のためにちょっと家に帰ってきません」というのでは、幹部クラスの仕事は務まらないのではないかと。家事や育児に男性の協力が得られない現状では、企業や官庁で幹部になる女性は独身か子どもが大きくなった人に限られる傾向がある。だから女性が幹部になりたがらない。

そんな現状を変え、「私も思い切り仕事をした」と意欲に燃える女性を支援するため、外国人ナニーというインフラが必要だ。女性の就業率を男性と同じ80%にまで高めることができれば、日本の労働力人口は820万人増え、国内総生産(GDP)は15%伸びるとの試算もある。アベノミクス、ウーマノミクスに続くナニーノミクス(Nannyomics)もある。

さとう・くみ  
1959年東京都生まれ。米ウエルズリー大卒(東アジア学)。コンサルタント会社などを経てコスモ・ピーアール社長。97年以降ACCJ役員も歴任。